

Title	特集：移民の市民的統合の内実：政治社会学的地域研究の視座から
Sub Title	
Author	塩原, 良和(Shiobara, Yoshikazu) 昔農, 英明(Sekino, Hideaki) 鈴木, 真弥(Suzuki, Maya)
Publisher	三田社会学会
Publication year	2016
Jtitle	三田社会学 (Mita journal of sociology). No.21 (2016. 7) ,p.1- 2
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	特集：移民の市民的統合の内実：政治社会学的地域研究の視座から
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AA11358103-20160702-0001

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the Keio Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

特集：移民の市民的統合の内実—政治社会学的地域研究の視座から—

塩原 良和・昔農 英明・鈴木 真弥

近年、欧米諸国やアジアにおいても、移民の市民的統合ということが政策的に盛んに論じられるようになった。市民的統合とは、受け入れ国の公用語、歴史、文化の習熟を通じて、移民の社会・経済的統合を目指すという政策方針・言説のことである。

その一方で、市民的統合では、移民の有する母文化・母言語の保持・発展がなおざりにされているという批判も生じている。市民的統合とは、実質上、同化に他ならないと論じられることすらある。しかしながら、受け入れ国に移民が居住するに際して、実際のところ、前記のような文字通りの市民的統合、あるいは同化が生じているわけでは決してない。ローカルレベルでの自治体、あるいは移民コミュニティの実践・対応を見たときに、受け入れ国側と移民側との関係性は、政策言説が捉えるよりも、より複雑な様相を呈することになるからである。

2015年7月4日に開催された三田社会学会大会シンポジウムでは、欧米先進諸国の事例を中心に、移民統合の実際のあり方が各国の政治的・社会的な文脈、あるいは移民集団において、どのように現出しているのか、その内実を明らかにし、移民統合の現況を政治社会学的な視座から検討した。本特集は、このシンポジウムでの報告やコメントをもとに、当日の討論の成果などを加味して執筆された論考を収録している。

それぞれの論考については、関根政美（慶應義塾大学）・吉野耕作（上智大学）両氏による的確なコメントがなされている。すべてが、現代先進諸国の移民受入のあり方に真正面から取り組んだ重要な論考である。昔農英明氏（明治大学）の「ドイツにおける市民的統合と移民組織：ムスリム移民の活動の変容」と、鈴木規子氏（東洋大学）の「フランスにおける市民的統合と移民の動向：ポルトガル系移民の政治的・経済的統合に関する事例」は、シンポジウムが開催された2015年7月以降、日本でもますます注目されるようになった欧州諸国の移民・難民問題を考える際に有益な示唆を含む。いっぽう小林宏美氏（文京学院大学）による「アメリカ社会における移民の社会的統合と公教育：教育政策のマイノリティ児童生徒への影響に着目して」は、移民の社会統合のあり方を大きく左右する公教育に焦点を当てている。これらはいずれも、執筆者たちの長年にわたる現地調査の経験を踏まえた説得力ある論考である。いっぽう竹ノ下弘久氏（上智大学）の「マクロな制度編成と移民の社会経済的統合」は福祉国家論・社会階層論の観点から移民の統合を論じており、同氏が取り組んでいる移民・外国人住民と階層の関係に関する計量的研究の成果に基づく貴重な論考である。

本特集の副題である「政治社会学的地域研究の視座から」の由来について、ここで説明を加えておきたい。コメントをお寄せいただいた関根先生は、執筆者各氏、およびコーディネーターである塩原の大学院時代の指導教授である。先生のご著書『エスニシティの政治社会学』に

接したことが、私たちの研究の出発点となった。その後、弟子たちはそれぞれの分野で研究を進め、現地調査を行い、論文や著書を執筆し、大学での職を得て、若手・中堅の研究者として活動するようになった。2015 年度をもって関根先生が慶應義塾大学を定年退職されるにあたり、その学恩に報いるために何かできないかと考えたことが、本企画のきっかけである。さらに関根先生とともに長年にわたり日本の国際社会学を支え、私たちも大学院時代からお世話になってきた吉野先生に、コメンテーターとしてご参加いただけることになった。それにより、本企画は日本における人種・民族・エスニシティの政治社会学の 20 年間の蓄積を、若手・中堅の研究者が先達に問いかける世代間対話の意味をもつことになった。

本企画は昔農と塩原、およびやはり関根先生の指導を受けた鈴木真弥（東京外国語大学）が協力して練り上げたものである。鈴木真弥は諸事情によりシンポジウムに参加できなかったものの、準備段階では大きく貢献した。よって、この序言は 3 人による共同執筆となっている。本企画にご参加いただいた報告者およびコメンテーターの各氏、貴重な機会を提供して下さった三田社会学会、ならびにシンポジウム当日の聴講者をはじめお世話になったすべての皆様に、厚く御礼を申し上げたい。そしてこの場を借りて関根先生に、これまで受けた御恩への深い感謝を弟子一同からお伝え申し上げたい。

(しおばら よしかず 慶應義塾大学)

(せきのう ひであき 明治大学)

(すずき まや 東京外国語大学)